

露時雨八代慈抄
中

遠 13
1860
2



13
1860
2

雨露時雨八代愁抄下の巻

烏有山人三畏行者編

其二の轉末

かくく極久を八代目之升が上坂比手候うゆくと
神保也藤原へゆりく名お屋具抄の目録を大
坂においしく埋合を對鏡具お状通し徳
その夜の内お支度をも調へ下子代を宛脚
とて浪花へ申送るお大坂おとく候て隠居



示一の目せ輝八代目を名古座まで納出し白檜の
名を禱り修り己し其より十一年の名ハ方の
後承不継せし二升も永く大坂お止めと進く
父子連あり自由自在おかけ歩行掃磨煥伎
の進まりよりハ文之備後の尾道安藤此又島
長崎の果まぐもお出しと大金成せしあり
安樂不承を承りつり長生おられバ慾の進く
なるありと足事一をあらび有かりハも進し

く成くあれもわしと長もわしとふるおと
しがる貪慾といふ慾捨去して我子おがくあり
大急者おありし二升成お放しと江戸お進
更がりやおあり手元お引南進く大金成しより
又もとせもせんとい頃の大慾物をわけて進立
する二升が説も用ひば親の威光を揮き
め着の鏡おも各成取より法をとれといふ
捨あより十おあ又十おあより女おとるあ

でも多き成るが尚附の襟元別して没者此
業体も天下通用の理とも更かきり是れ
ちと至理有る事と云知るが其至理で通
せばその至理も先でい義知してそれも成む
といふせよく通むが没者のあうまひかれも
今の為が着い時付くわさるうめそのし大分
き成るといふ物と思ふ事多くおぬしが是れ
體におれが了當を入く西年御く是れ

るる鬼不換持といふよりも大丈夫なる事
命没者、
屈ぬる有るもその布を有るが云おて業に
ゆんでゆいて下さる世の中不人を教へ物成
是れ又別のゆ其外よりひみ成りてあて
罪も有るが義理の悪い位の更さる不
もかゆしるされく見ぬありにおま返し
の方便先組より八代まで守りて不
戸への改りかかるといふ物かありる

かき懐のあはしめて人さぬが寄てあつてどうも
て下さるの月おえとくわらまが心を大きく持と
ひ名古屋おわると思つて大坂へつて女見れ日教を
る内江戸へつて途ひがあさるうきさめの時より其時令
を並べさるうば其時の隙機懸愛奇計を出し
くお黙し一頁さぶがゆるかのりさ着又うまき
るう十か勝利を獲がわれはどうでもるおぬしが
括おぬが弱くても年中人おこりらう夷狄お在

てと夷狄を討おぬれが胸の方甘お在事と日次
毎お賑うが如く統さるおぞと非も其理お伏して上
坂と心を決し父が難お遊ひさるおおろう美名お客
より途の駕のあしを幸ひ美の顔屋へおれは兼て心
お覺えある婦人の憐しむえ客つりと云えとく独散附そ
一度お逢ふを踏ともさる切るる意の情をわらじ若か候
の情おを妻が命の百歳も何おくせんともげんおぬれ
命綱うらむおぬれともさるくと非もはじめぬおぬれ

身の上よりあらぬ事といひるが深窓の内におもひ
の我の身も親のあはれをうけ流れの身と成て心づく
し身をつくりかへすやあひれしるの流しよよそそ
はしをうり我身はび一生の流流おわる一大事なりて
身のみめ最中お客ともことより城のびきふしを思
ひあふらありて夢はば思し不思議の縁まく
流々の物より夢はば切る志我をありあてのうたん
るん我身よりまきまきとあめあめをきひをさくば

後述つておませんといひせのころひ濃におあふを別れの
初とら神ありぬこのあうきりしてあうく文はさくや
まを客ありてと非か旅宿ふゆぬをさく一夜の内お
述がごをい付てこのあをまきまき納車お上坂のよう
あたりありしおまきごの者へいやの門をおく介するに
敬言されてるごりをくも互列れんひうう後がごま
トをさくごるおしるうびくぐんよわどおそれれば車
がくや入してそ目の奥妙を急ぎまき納くそのよ

出るとと極りてうぐくふせはくさうぐとあらそ
らうふせめてまの二条徳ゆす一垂て心するげも
もちを急まうふ主七月廿七日伏見より大坂より逆の者
大ぜいの文一て別船を仕立て同廿八日登船あそく
りりるふと舟の白猿とるのり大坂へのりゆるれば
街の陣づんぬびはしく大江戸の市川團十郎いこく
いひきぬといふひいきぬの定うてともちの旅ゆき
まうりやゆりふゆりふもまをぬ中へるまをいあつけぬ

下とき及びび子父海充養も白猿とくはして上坂は
例ふませ八代目も又白猿と成て来るとするふの面目なり
とく大直さませの連中へさる市川一統ふや合せがどく
我もくと見おふゆる故及於るのんゆ大方るる市川
團十郎父ふび子ふめんの致付ひて日くす女目のる出勅
をゆいあふも親うくくの養れある故有り市村家橋もと
坂の崎へおれどもおし病を治すお弱致あふるる
ううあがうく花中るるも中経区方小新白猿とぬぬも



〜く江戸にしましき繪を御座りわねど云ふは素願をいんんと
東極の両側より道頓堀のわたりを舟火成る迄待たせ
積物より目下の提灯をてし連く鉦をこふく時
あれは琴の味せんて唄もわりかりの光の水小移りて
白雲よりゆく天満天神の祭禮小紡小より茶やの暖簾
ふんふん小蠅蠅飄々んつるだつてやん引まく天まき水引本
皆八代の故づらうと緒どことと搦城出し中居小女ろ居り
新白檜のせういと有りて清更いさるぞいしほれ植久の島

の月には寺筋任先の陣ふ孝ひぬ家あは成道成て白檜
の旗名に万端燈籠してと道門才六七輩の恒形とをゆ充
新が方より夜具調度をかき入爾れ品敷き持せしはこれ
ど旗中の仮宅をのりおく道とて二階ふ六五の座酒を
を白檜の居間とてさるお釣らう目この来客多く二階より
居る居るもろく父海充るこそとて大坂おの事ゆへに
名傑のまよりも時二年が上坂を越へ堂徳運よん此後
来其外酒肴の類は山持込ぐ居る所もおく先より見へ

修れく^{すく}盡不^く樂^が入^りて^は稽^こ古^こあ^を呻^り去^るに^はあ^らむ^るが^も茶^を
唇^はあ^らむ^くわ^らむ^かり^の事^もひ^りが^らあ^らむ^る日^もあ^らむ^る事^も
ふ^た七^日の時^は足^らぬ^一思^ふ事^もあ^らむ^るを^も暇^もな^く徒^らす^事も^な
と^も死^なす^るに^は思^ふ事^も古^くと^もあ^らむ^る事^もあ^らむ^る思^ふ事^も
ま^たう^まり^て是^の所^の舞^臺も^もく^も事^も由^りあ^らむ^る按^ささ^る数^万
の^見物^も有^るれ^ども^も張^調子^も高^く身^を今^くと^もせ^らむ^事
心^もむ^の中^にに^は死^なう^と思^ふ事^もあ^らむ^る思^ふ事^もあ^らむ^る
お^同心^を養^て胸^をあ^らむ^事も^も其^の社^の人^も暇^をあ^らむ^事も^も

一^は少^し不^快の^由あ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^も
涙^もあ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^も
と^一声^もあ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^も
死^のつ^く者^もあ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^も
れ^もあ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^も
泣^燈も^もあ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^も
と^の泣^もあ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^も
と^外常^もあ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^もあ^らむ^事も^も

不能眠らんと言ふ時を益眼さくし移ればさるの東
雲一及び以漸く熱眩さる也知麻有り新石機移り
れぬまつろく心廻らる不離優の長き市川の
家不中れ方の父母の賜有り先祖の遺成田山を動明
玉の如き後を歩み大い戸奥原の余光を引く一虎の
因敗ふもわらる舟の上と降り事今く法をまわされ
ゆれをすつじく今更りもわらる之義向病身ゆ
湯浴願をす之父不射向も付方あり夏休此間

旅非さるも大勢の家屬をまきえが居られ内々の度
も能くゆりあり隠しとてわくされば父海光をへ之州
吉田の在る旅芝居ありあけり父大不名古屋(出動
一芝居さくゆきまふせひたふ今一期り！通められ
其日妙を大坂あり候し命しと勤めと候しに候入を
候れおさうが守り上坂とふぬれどけり續き候あり
ぬれを場始を云を石古屋(おれさるはまれり
堀一願しと云は候の仕極もは父の祠をすさる

ふ存り用ゆるは江戸表一石我理ありと今と約
一石取とも一石の束を移りながら強固して大坂をわけ
まがり各々白根とわけてきて固十部と大江の石田を
各段にわけしては先祖へはぬば江戸もまた各段に只石の
毒なるハ根とのま希の事この損失にけりゆけがれ
に命代若出をり人跡を定めり建ちたこと程
でもいじょうと通上と云ふ事とすも遠く
のがせもいさねがひ信るる折るる不慮なるに
て

と世界の有りはむらび内外の支拂わけにお説する
お方も有り宗匠にもはまはるる智恵をあらう事
有る海山を登るる遠くは海にあらはるる
田の西隠居お内々中へんと思ひども是れは素人の
一萬一親父(編)ともあるべし小倉巻の親方おけ事
頼まかんと思ひつらお折るる病氣もて中絶
らふ事やハ朝代建しこれ昨日も初日の事今宵に
る我運命今生あり礼佛せんそ二階成ありるに

けしむる多男女皆多どもハ渡入るるとし知者有る
白猪と多洗をうひひ洗す死済みあ成汲火お
みて切火をおうけ二指へ取り札の上お番成燈塔時と云
しと有るものとぞ

金何所童子お辨して曰

衆生の時海更不及お中お神仏を念ぶる事あり今
夜も定しく例の肴勅と思ふお樹香の鹿野香燭之
うら故其奥の堪がさく天外お遊する人問ふお

香於腦を皆皆氣とまればお神仏しと是成以く不
淨の氣と出る事也此れお四天王守の庚申堂お
入佛の供養ありて百味の飲食を供へてお招れられバ
其守護を怠るの際有り是福の由々有るを又神
佛の上お有りなり

禍福門は人の操新入の常言あり宣るる或大坂の芝居
の位門極久の家業盤思して利益多らん事成思ふお
存を余方と頼る名お屋おあり分方と誤して送お八代

円成てふ今も海の花は一つ花は一つ水は一つ止むんと欲をたり
又も海の花も我の惡し思ふ存を親のいふ言を速に
きびとも義利がてまる強情成の子は思ひ何れも
我の引かおれ只は山を登りとも苦く梨の實は美く
食安樂を心をく世界の病理合もともはしとも
衣帯脂を性を地の遠感をも更に海を
生れるりさる由は不現在時が死後時もあるゆえに
今更ふんがし志をれども江も没者れ少し中を成す

